

## 東北応援ツアーレポート(宮城県コース)

テーマ 現地を訪問して思うこと

氏名 柳澤照夫

卒業年度 1972年

卒業学部 理工学部

震災・津波被災1年後に「がれき」処理の業務で1年間宮城県仙台市に滞在していました。休日の日には、北は気仙沼から南は亶理までよく出かけて行きました。何処も「がれき」と建物の基礎だけで、場所によっては船が打ち上げられていた状況でした。津波の恐ろしさを感じたのは、5階建てのマンションかホテルで多分オーシャンビューで人気だったと思われる建物の1階から4階までが、海側から山手が丸見えの吹き抜けでしたが、5階部分だけは何事もなかったかのようにカーテンが見えました。建物の中で津波に遭遇された方々は想像以上の恐怖を感じただろうと思いました。当時は被災された方々とお話しする機会もなく、1日も早く復旧させることが使命でした。ただ地元の仕事仲間からは、3・11の数か月後の強い地震の時ガソリンスタンドに長蛇の車の列が出来たと聞かされました。3・11の時には避難所もなく車中泊するにも燃料もなく寒さ対策は大変だったと思いました。現在は私の車の燃料はタンク半分で給油するように心がけ、知人にも教えています。

今回訪問して直接被災された方々の体験談を聴くことにより、今まで想像していた以上の津波の恐ろしさを教えて戴きました。

南三陸では町が無くなり高台の学校を避難所として開設し、被災者の受け入れと救助についてのお話を聞かせていただきました。津波の第一波後生徒達を救助に同行させた事「二波・三波による二次被災の危険」について反省しているなど、今までに知らなかった事を教えて戴きました。

又津波から早く逃げる為には群集心理で皆でいれば安全ではなく、早く非難することの大切さも教えて戴きました。ペンギンは1羽が海に飛び込めば他のペンギンも続けて飛び込むそうです。津波の時には「ファーストペンギン」になって安全な場所に避難することが大事だとわかりました。

松島の宿泊ホテルでの勉強会では、被災された校友の方々(石巻・名取関上)の工場再建に至るまでの御苦労や商品開発などのお話を伺いました。

自分自身にこのようなバイタリティがあるのか自問自答し情けなさを感じました。

名取市関上地区では盛り土工事が始まり集合住宅工事の一部が始まっていますが、住居はいまだに仮設住まいの方が沢山おられ復興はまだまだ道半ばの状況だと伺いました。かたりべの女性からは、楽しい日常生活や思い出までも津波が奪っていった恐ろしさを教えられました。

被災され嫌な思い出を再度思い浮かべながら、我々に語って下さった皆様方に心から感謝し貴重な時間を戴き本当にありがとうございました。教えて戴いた事柄を是非地元に戻り教えたいと思いました。

私の居住地は大阪南部で高台にあり津波の心配は殆ど有りません。(海拔52~165m)しかし何時何処で遭遇するかわかりません。

現在大阪府スポーツ少年団に所属した武道を(約20年)地域ボランティアで教えていますので、生徒や父兄の方々に、今回のツアーで経験体験したことを伝えたいと思っています。

「命を守る防災の大切さ」のために防災意識を常に持ち具体的に備える事。

津波は第一波だけではなく第二波・第三波と来る事、津波に遭遇したら堅固な高い建物の3階以上にファーストペンギンになってでも逃げる事。

以上の事を最低限でも理解していただけるように教えていきたいです。

最後に以前仙台滞在中にお世話になった方々にお会いするため、帰阪を2日遅らせました。帰る当日の朝地震が有り、津波が来るとの事で仙台空港は搭乗手続きは出来ない状況との報道が有りました。早めにホテルを出て仙台駅へ、ところが津波の関係で空港アクセス線は不通でした。

帰りに津波の影響による常設交通機関マヒ等の体験をした応援ツアーでした。

皆様本当にありがとうございました。